

血の思い出など

今回は、恐ろしい話。お化けや超常現象が苦手な人、あるいは、幼少時代に大きなトラウマを抱えてしまった人は、これを読むことをお勧めしない。

昭和40年代のはじめ、大分県の山村のできごと。

農家では、肉用牛や豚を飼っているところが多かった。子どもが家畜の出産に立ち会うことは、生命の大切さを実感できる貴重な体験である。この話の主人公の男の子も、豚の出産の助産婦の手伝いをした。助産婦は、この子の祖母である。生まれた赤ちゃん豚を取り上げて、ポロ布で体を拭き、へその緒を切ったりする。へその緒を切るときは、まず、へその緒を糸で縛って止血した上で、カミソリで切断する。消毒は赤チン。

この子は、子どもながらに、きつく縛っては赤ちゃん豚が痛がるだろうと思い、ゆるくへその緒を縛った。それで、カミソリで切った途端に、ピューっと血が噴き出して、祖母の顔にかかった。この子は、頬に斜めに血の筋がついた老女の顔を見ながら、子豚が死んでしまうのではないかと、祖母に叱られるのではないかと、とても心配になった。……ただ、そこまでの記憶はあるが、その先、祖母に叱られたかどうだったか、思い出せない。あの時はきっと、母豚が急に産気づいたのだろう。

子豚が生まれて、しばらくたったときのこと。

雄の子豚には、厳しい試練が待ち受けている。大分のその山村の方言でいうところの「キンヌギ」の儀式である。去勢手術のことだ。キンヌギとは、あまりにストレートな表現。これも獣医が行うのではなく、農家が自分でする。執刀医は父親で、子どもは助手である。

キンヌギはどのようにするかというと、子豚を仰向けにして押し込めると身動きできなくなるような木箱があり、子豚の自由を奪っておいて、後ろ足の間のお腹のあたりに見当をつけ、カミソリでお腹をちょっとだけ切る。すると、焼き鳥の砂肝のような器官が、ポコッと飛び出す。あとは、へその緒と同じである。やはり、消毒は赤チン。

そして、ここでもまた祖母が登場する。……「よしお（仮名）お前もワリィことすると、キンヌギされるぞ〜。」この子は、ワリィことは絶対にしちやならんと強く思ったのだった。

沖縄民謡に、「ていんさぐの花は爪先を染めて、親の言うことはチム（肝？心？）に染みる」とある。おばあの脅しは、タマキンに染みる。この子は、成長の過程でいろいろなことがあり神仏を信じない人間になってしまったが、実家に帰ると、必ず仏壇には手を合わせる。生きている祖先を見たのは、この祖母だけだ。この子の兄も、同じことをするから笑える。

幼稚園の頃だったか、もうちょっと小さい頃か。ときどき家の中で10円とか50円が落ちていて、その子がそれを見つくと、祖母から「お金があったか。よかったねー。それは貯金しておこう」と言われた。そして、貯金すると言って親にお金を渡すと「偉いねー」と祖母に

誉められた。今思えば、あれは家族の作戦だった。・・・お金は、まず使うのではなく、まず貯めておくこと。あるいは「お金のけじめ」に厳しくあること。お金が貯まっていくことではなく、管理を明確にすることで、けじめをつけることを教えたかったのであろう。

この子が大人になった今、NTTの料金振込書とか外注先からの請求書がくると、すぐに支払いを済ませないと気持ちが悪くなるのであった。NHKの受信料も、相手の弱みに付け込んで、銀行で自動引き落とし停止の手続きをしてやろうかと思うには思ったが、それは、面倒臭いのでしていない。銀行の窓口の人と顔見知りだし、何か思われるのも嫌だし。

それはさておき、あのときの貯金を、この子は大人になった現在でも手にしていないのである。・・・でも、要はそんなもんだ。それでいいのだ。けじめが身につけば。

子豚のお腹の傷も癒えたころ。

この子は、クレヨンしんちゃんのように、親の前で、ホレホレ~っとやっていた。父親もまだ若かったのであろう。ちょん切るぞ~などと言いながら、ハサミでチョコチョコの真似をしていた。そのうち、ホレホレ~とチョコチョコのタイミングがたまたま合ってしまい、ハサミの先端が先っぽをちょっとだけ傷つけてしまった。実は、ケガ自体は、蚊が刺してブクッと血が出た程度であったが、場所が場所、状況が状況だけに、父親は一瞬固まってしまった。この子は、こういう場面では泣くしかないと思い、思いっきり大きな声で泣き出した。それを見ていた母親は、烈火のごとく父親を叱った。この子は、母親のあまりの剣幕に驚き、ウソ泣きしている自分のことも怖くなり、また父親に申し訳なく思い、ますます泣いたのであった。

大事なところに傷は残らなかったが、心には、しっかり教訓が残った。・・・子どもは、ウソ泣きをする。そして、ふざけて過失を犯してしまった大人は、ものすごく惨めだ。

昔、この子は、確かに家族の一員だった。生きていく単位としての家族の、一員であった。核家族という言葉は、単に世帯人員の減少を指すだけではない。「核家族」化は、「生きていく単位としての家族」を強く実感できなくなった、という意味を持ってきたように思う。

人間は、自分の記憶をどこまで遡ることができるのだろう。

この子も、豚のへその緒を切った記憶はあるが、自分のへその緒を切られた記憶は、当然ない。この子の記憶容量は、どうやら大変小さかったようだ。子どもころ、毎日どんなご飯をたべていたのか、ほとんど記憶にない。でも、こんなことは、母親には絶対に言えない。

食べ物の記憶といえば、幼稚園の頃。お弁当のおかずゆで卵が入っていて、それをポトリと床に落としてしまった。この子の家は「死にあーせん」の主義だったので、それをまた口に入れようとした瞬間に、隣の席の女の子が、「あー先生、この人落ちたものを食べてますぅ~」と思いっきり大きな声で言った。この男の子は、利発な子だったので、一般家庭の衛生観念というものを瞬時に理解し、「冗談、じょーだん」とおどけてみせた。お友だちの視線をクギ付けにしたのは当然のことである。悲しいかな間違いなくこれが、生まれて初めて「冗談」という言葉を使った記憶である。そして、これを境にこの子の「子ども時代」は終わった。それ以後、都合の悪いことは、データを「上書き保存(はい)」で消していくという、大人の生き方をするようになった。だから、この子がいい年になった今、子どもころの記憶が極端に少ないのは当然のことである。本当に、子ども頃の記憶が少ない。